

自主シンポジウム 21

子どもの「生きる力」について考える

--子どものたちが生涯を通じて自分らしく生きることを願って--

企画者： 川村 協平（山梨大学教育学部）

司会者： 生山 匡（山野美容芸術短期大学）

話題提供者：

吉田 弘道（東京都精神医学総合研究所臨床心理研究部門）

山縣然太郎（山梨大学保健管理センター）

川村 協平（山梨大学教育学部）

吉田弘道

「子どもの生きる力の持つ心理的側面」

話題提供の論点

吉田弘道：子どもの生きる力に関わる心理的側面

山縣然太郎：子どもの生きる力に関わる身体的側面

川村協平：子どもの生きる力に関わる社会的側面
（特に自然体験を通して考える）

<企画要旨および討論の意図>

文部省の中央教育審議会では青少年の「生きる力」を育てる教育の必要性を強調している。

一方現代の日本では、自然破壊が進み、幼い頃から健康が脅かされている。また、情報が氾濫したり、食料が多すぎたり、人口が多すぎたり、各種のストレスが多すぎたり、子どもが学校で覚えなければならないことが多すぎたりなど、子どもにとってその能力を超えた力を要求されているように思われる。これは子どもが持っている能力では間に合わない暮らしを強いられている現状にあることを意味する。

また、今の暮らしでは、子どもがもっと発揮できる能力を持ちながら、それを使ったり磨いたりせずに暮らしているのが現状である。

それは、自然が少なくなってきたこと、遊びや運動が少なくなってきたこと、隣人や地域の仲間との関わりが少なくなってきたこと、他人への思いやりが少なくなってきたこと等々からもその原因を探ることができるかもしれない。

そこで、このような現状をふまえてみると、現代社会において子どもに「生きる力」を本当に育てることができるのだろうか、なにをすればよいのだろうか、また、どのようにできるのだろうか、誰ができるのだろうか。

今回のシンポジウムでは「生きる力」の持つ意味を心理的側面、身体的側面および社会的側面などからとらえながら、現代社会の中で子どもの「生きる力」を支えていくために必要な考え方や社会、親の果たす役割について問題提起し、参加者の皆さんと一緒に考えてみたい。

子どもの生きる力は、その人なりに生涯を通して自分らしく生きることにつながる。このことは、老年期の発達心理学的研究によって明らかにされている。私は、子どもが生きる力を持ち、その力を発揮するためには、どのような心理的要素が発達していなければならないか、またそれらの要素が発達するためには大人のどのようなかかわりが必要であるのか、保育者は子どもにどのような対応をしたらよいのか、といったことを、近年の新アタッチメント理論の研究成果をもとにして考えてみたい。

生きる力の心理的要素：子どもが生きる力を持ち、その子なりに生き生きと生きるために必要な心理的要素としては、自分自身と親しい人に対する安心感、この安心感を基盤として、心の中に想像力をはたかせる広い空間があること、自分に周りの人や世界と関わる力があるという自己効力感を持ち、自己主張ができて、自己イメージを獲得し、主体的に行動することができ、困難解決能力を持てていること、さらに自己制御、感情制御もできることである。

いかにして発達するのか：近年の新アタッチメント研究では、アタッチメントの安定感が、想像力、自己主張、良い自己イメージ、主体性、困難解決能力、自己制御、感情制御と関係していることを明らかにしている。

どのような対応が必要か：自分と人への安心感は、子どもと大人とで形成される安心空間の中で作り上げられる。この安心空間の中で、大人は、子どもの欲求を理解して適切に対応して満たすこと、子どもの感情に共感的に対応すること、子どもの主体性を認めること、子どもを統制すること、を行う。このような対応は、親子の間だけではなく保育の場でも、保育者の態度として大切である。保育者は、自分の接し方が、子どもの生きる力をつける方向に作用しているかどうかを常に意識すると、子どもの見方と自らの対応に対する見方の両方が、より発展的なものになると考える。